

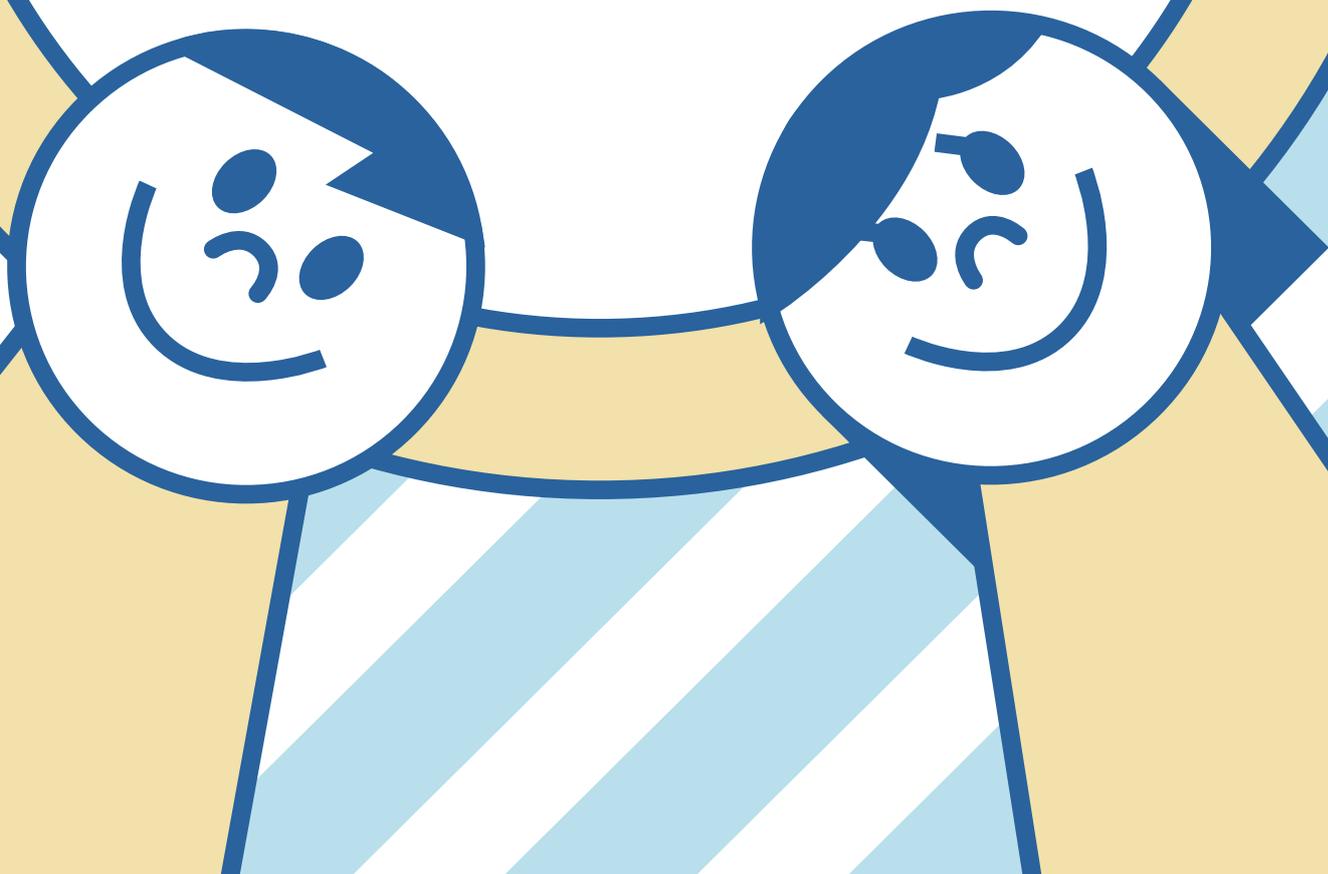
男女共同参画推進のための

ワールド・カフェ

実践手引書

(改訂版)

WORLD CAFE OPERATIONS GUIDE



はじめに

いま、この手引書をお手に取られたあなたは、男女共同参画を推進する立場の方でしょうか。本手引書は、男女共同参画推進のために「ワールド・カフェを活用しよう」とされている方に向けられた実践の手引書です。特に、大学や行政機関、民間企業等で新しく男女共同参画を推進する立場になられた方にとっては、「いったい、どこから、何をしたいのか分からない…」というような状況かもしれません。本手引書は、まさに、そのような方に向けて作成されています。

本手引書の中の「ワールド・カフェを企画する」では、ワールド・カフェをどのような手順で開催していけば良いのか、その手順を具体的に示しています。本手引書が実際にワールド・カフェを企画される方にとっての参考になれば幸いです。

さらに、もう一段階、上級レベルとして、目的や状況に応じて、ワールド・カフェの形を変形させる「ワールド・カフェ・デザイン」の部分にも触れています。ワールド・カフェは、あくまでも話し合いの道具（ツール）ですから、使い方は目的や状況によって、毎回微細に異なります。平成24年度から27年度まで文部科学省で取り組んできた4つの事例（東京、福岡、三重、富山）を御覧いただきますと、よりワールド・カフェのデザインの幅が広がると思われます。

その他にも、ワールド・カフェに参加した学生の声を紹介したり、「男女共同参画について知っておきたい6つのポイント」をおさらいしたり、全国での類似の取組事例も紹介します。是非御覧頂き、男女共同参画推進のために本手引書を御活用いただければ幸いです。

目次

・はじめに	2
・なぜ、男女共同参画推進にワールド・カフェが有効なのか？	3
・文部科学省主催「学生のための男女共同参画ワールド・カフェ」の歩み	4 - 5
・男女共同参画について知っておきたい6つのポイント	6 - 7
・ワールド・カフェを知る	8 - 10
・ワールド・カフェを企画する	11 - 21
・ワールド・カフェ事例①（東京）	22 - 23
・ワールド・カフェ事例②（福岡）	24 - 25
・ワールド・カフェ事例③（三重）	26 - 27
・ワールド・カフェ事例④（富山）	28 - 29
・全国各地の事例	30
・おわりに	31

なぜ、男女共同参画推進にワールド・カフェが有効なのか？

1

身近なテーマだからこそ、誰もが話せる。

ワールド・カフェには、話し合うための「問い(テーマ)」が設定されます。男女共同参画の分野は、ふだんの「暮らし」のことから「仕事」や「家事・育児」のことまで、「男女に関わる全てのこと」を含みます。だからこそ、誰にとっても「私のコト(自分事)」として、話し合うことができます。

2

少人数だからこそ、本音が話し合える。

ワールド・カフェの各グループは、4～6人の少人数です。男女共同参画のテーマは身近なことでも、人数が多ければ、なかなか自由に話し合うことは容易ではありません。しかし、少人数であれば、ふだんは話し合いが得意ではない人にとっても、気軽に思っていることや感じていることを話すことが可能になります。

3

カフェのような雰囲気だからこそ、難しく感じない。

本来は、誰にとっても関係のある男女共同参画。しかし、「男女共同参画」と漢字が6文字並んでいるだけで、「難しい」という印象を与えているのかもしれない。ワールド・カフェでは、カフェのようなリラックスできる雰囲気づくりをすることで、「難しさ」を緩和することができます。

4

席替えによって、多様な視点が得られる。

ワールド・カフェの一つの特徴には、席替えの方法があります。1回20～30分の話合いのラウンドが終わると、各テーブルに1人だけを残し、他のメンバーは旅人として、全員がばらけるようにして席替えをします。そうすることで、いろんな人と交流することができ、多様な視点を得ることができます。ダイバーシティ(多様性)を重要視している男女共同参画にとっては、ワールド・カフェは「相性の良い手法」と言えます。

5

対話の中で、様々な気づきや学びが得られる。

男性にとっても、女性にとっても、生きやすい社会を目指すためには、お互いの異なる考え方を擦り合わせる「対話」が必要です。ワールド・カフェは「対話を誘発する装置」でもありますので、対話を通して、様々な気づきや学びを得ることができます。

ワールド・カフェとは？

ワールド・カフェとは、カフェのようなリラックスできる雰囲気の中で、メンバーの組合せを変えながら、4～6人の小人数で話し合いを続けることにより、深い相互理解や新しい知識を生み出す話し合いの手法です。(→詳しくは、p8-10を御覧ください)



「学生のための男女共同参画ワールド・カフェ」の歩み

これまで文部科学省が実施してきた「学生のための男女共同参画ワールド・カフェ」の概要と参加者の声をご紹介します。

in 東京

- 日時：平成25年2月26日（火）13：30～17：30
- 場所：文部科学省3階講堂
- 主催：文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課
- 後援：内閣府男女共同参画局



思った以上に考え方が多様だった。

もっと将来の自分の「人との付き合い方」を考えたいと思いました。

自分が想像していたよりも、広い視野や考え方、生き方があることを知った。

知らない自分を知れてよかった。

当事者が意識していくことで、変化していくものだと思う。

同年代で濃い話が出来て有意義でした。

学生のうちは男女差が見えるところが少ない。

参加人数
男性 57名



参加者の声

in 福岡

- 日時：平成25年12月21日（土）10：00～12：30
- 場所：西日本総合展示場（福岡県北九州市小倉北区）
- 主催：文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課
- 共催：NPO法人ファザーリング・ジャパン、北九州市立男女共同参画センター・ムーブ、独立行政法人国立女性教育会館（NWEC）
- 後援：内閣府男女共同参画局



自分の考え方に固持せず、多くの人の考え方に触れられたことで視野が広がった。

今後の課題が自分なりにできて、少しでも成長できたかなと思い、良かったです。

同世代の人と男女共同参画について話す機会がないので、お互いの考えを交換するのはいいなと思った。

最初は初めて会う人とうまく話せるか不安でしたが、とても楽しかったです。

男女の隔たりって案外自分の中に無意識にあるもので、話すことで気づけた。

「働く」ということへの考え方が変わりました。

同世代の人たちが「このようなことも考えているのか!」と思い、自分も頑張らなくては!と刺激を受けました。

参加人数
57名
男性 30名
女性 27名



参加者の声

in 三重

日時：平成26年6月28日（土）10：00～12：30

場所：四日市市文化会館（三重県四日市市）

主催：文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課

共催：NPO 法人ファザリング・ジャパン、三重県

協力：独立行政法人国立女性教育会館（NVEC）、国立大学法人三重大学

後援：内閣府男女共同参画局

参加人数

115名
男性73名
女性42名



参加者の声

自分の認識がまだまだ幅の狭いものであることに気付かされました。

女子の中でも意見はさまざまでびっくりしました。

今を当たり前・常識と思うのではなく1人1人が変えるべきと、気づき行動していかなければならない。

男女間の考えの違いはやはりあるものの、同時に共通の考えもあって共感できた。

自分の中での意識がガラッと変わった。

話し合いをしていると自分の考えの曖昧さが分かった。もっと具体的に考えていると思った。

男も女も人間という考え方で共に歩みより共に尊重して社会に向けアクションを起こせばいいんだと感じました。



in 富山

日時：平成27年11月7日（土）10：00～12：00

場所：富山県民共生センター サンフォルテ（富山県富山市）

主催：文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課

共催：NPO 法人ファザリング・ジャパン

協力：大学コンソーシアム富山、独立行政法人国立女性教育会館（NVEC）

後援：内閣府男女共同参画局

参加人数

80名
男性42名
女性38名



参加者の声

家事の分担は量で計るより気持ちが大さだと気づかされた。

男女の考えの違いについて理解が深まった。

自分がとても甘えていたということがわかりました。わがままな行動を慎み、人とのつながりを大事にしようと思います。

もっと家事に積極的に参加しないといけないと思いました。

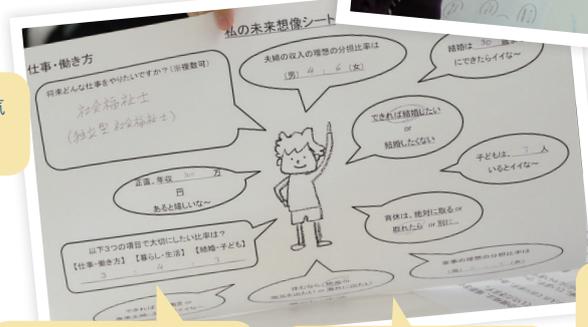
多種多様な考えがあり、それを認め合い、協力していく大切さを知りました。

自分が意外と古典的な考えの持ち主だと思いました。皆の考えを聞いてそれを吸収させていただき、次につなげたいと思いました。

このような場にもっと人が来れば、物事が変わるきっかけになると思った。

そもそもワールドカフェという手法を知らなかったのが、非常に新鮮だった。自分の中で明確でなかった考えが人に助けられながら形になっていく過程が楽しかった。

「自分はこうだからこう」という固定観念を捨てて、互いの意見を共有することが大事だと思った。



男女共同参画について知っておきたい6つのポイント

男女共同参画について知っておきたい6つのポイントを例示しています。詳しくは、31ページに掲載している各ウェブサイトをご参照ください。

1 男女共同参画社会の実現に向けて

男女共同参画社会の実現は、社会全体で取り組むべき最重要課題であり、「男女共同参画社会基本法」や「男女共同参画基本計画」等に基づき、政府において総合的かつ計画的な取組を進めています。

男女共同参画社会を実現させるための5本の柱

社会における制度又は慣行についての配慮

固定的な役割分担意識にとられず、男女が様々な活動ができるように社会の制度や慣行の在り方を考える必要があります。

男女の人権の尊重

男女の個人としての尊厳を重んじ、男女の差別をなくし、男性も女性もひとりの人間として能力を発揮できる機会を確保する必要があります。

国際的協調

男女共同参画づくりのために、国際社会とともに歩むことも大切です。他の国々や国際機関と相互に協力して取り組む必要があります。

家庭生活における活動と他の活動の両立

男女が対等な家族の構成員として、互いに協力し、社会の支援を受け、家族としての役割を果たしながら、仕事や学習、地域活動等ができるようにする必要があります。

政策等の立案及び決定への共同参画

男女が、社会の対等なパートナーとして、あらゆる分野において方針の決定に参画できる機会を確保する必要があります。

2

実は、日本は世界111位！？

「ジェンダーギャップ指数（GGI）」というものを御存じでしょうか。毎年、世界経済フォーラム（WEF）が公表しているもので、経済、教育、保健、政治の各分野について各国の社会進出における男女格差を示す指標のことです。2016年、日本は世界144か国中111位になっています。

順位	国名
1位	アイスランド
2位	フィンランド
3位	ノルウェー
4位	スウェーデン
...	...
109位	エチオピア
110位	ネパール
111位	日本

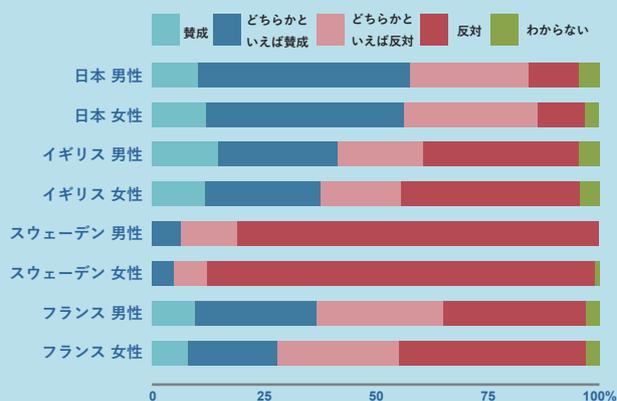
出典：The Global Gender Gap Report 2016
<http://reports.weforum.org/global-gender-gap-report-2016/rankings/>

3

「女だから、男だから…」を理由にしない

「女性だから、男性だから…」という性差を理由に、様々な役割を決めつけてしまう意識のことを「固定的性別役割分担意識」と呼びます。日本では、世界に比べて、特にその意識が根深いと言われています。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」といった考え方についての4か国比較（2015年）



出典：内閣府子ども・子育て本部「少子化社会に関する国際意識調査」（2016年3月）より作成

男性の理想と現実異なる

仕事と家庭生活への関わり方について、男性は特に、家庭生活を優先したくても現実には仕事を優先せざるを得ない状況にあるということが調査から見えてきます。理想を実現するための工夫や対策を共に考えていくことが大切です。

6歳未満の子供がいる夫・妻の
1日当たり家事関連時間（週全体の平均）※1

		家事関連時間	うち、育児
夫	共働き	1時間 7分	37分
	妻が専業主婦	1時間 5分	37分
妻	共働き	5時間 56分	2時間 24分
	妻が専業主婦	8時間 49分	3時間 57分

育児休業取得率※2

	2014年	2013年
男性	2.30% (+0.27)	2.03%
女性	86.6% (+3.6)	83.0%

(括弧内は前年比)

出典：

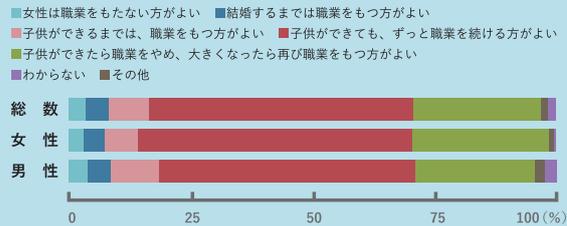
※1 総務省統計局「平成23年社会生活基本調査」調査票Aに基づく結果より作成

※2 厚生労働省「平成26年度雇用均等基本調査」より作成

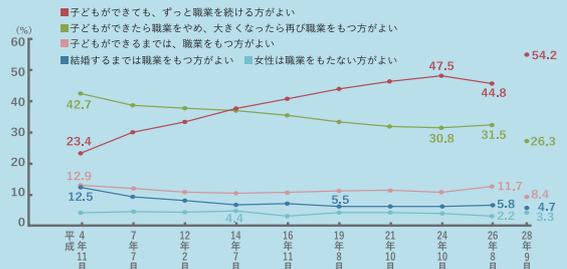
女性が職業をもつことに対する意識

「子どもができて、女性がずっと職業を続ける方がよい」と思う人の割合は多くなっていますが、その実現のためには、男女が協力し、ともに家事・育児に取り組まなければなりません。少ないといわれる男性の家事・育児への参加のためにも、固定的性別役割分担意識を変えるとともに、長時間労働を是正するなどの働き方改革を進めていくことも必要です。

女性が職業をもつことに対する意識（平成28年9月）



女性が職業をもつことに対する意識（時系列）

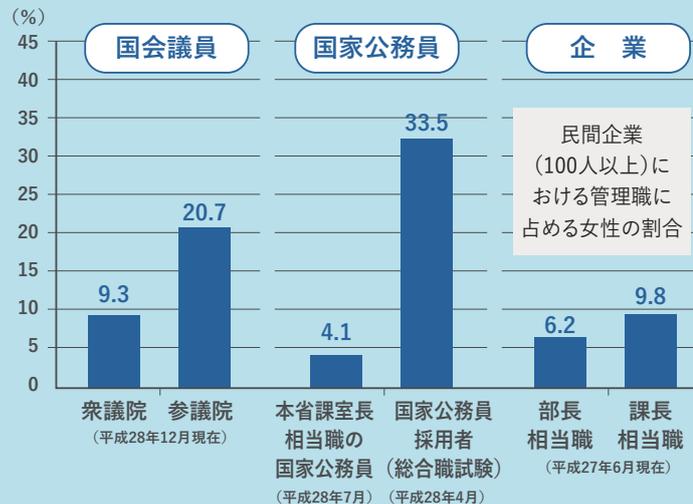


※平成26年8月調査までは20歳以上の者、平成28年9月調査から18歳以上の者を対象。
出典：男女共同参画社会に関する世論調査（H28年10月 内閣府政府広報室）より作成

「202030」この数字の意味は？

「202030」の数字の意味を御存じでしょうか。これは、2020年までに指導的な地位に占める女性の割合を30%以上にしようと、国が目標としている数字です。国家公務員の採用者や、専門性の高い職業に従事する者など、物事を決定する地位にいる女性を30%以上にしようということです。

各分野における「指導的地位」等に
占める女性の割合



備考 内閣府「女性の政策・方針決定参画状況調べ」（平成29年1月）より作成

ワールド・カフェを知る

1995年、アメリカで開発されたワールド・カフェは、今、世界中に広がり続けています。日本では、各地の自治体、企業、学校、病院、NPO、市民活動等の多様な場面で活用され始めています。ここでは、「ワールド・カフェの標準的な流れ」、「ワールド・カフェ・デザインの可能性」、「ワールド・カフェを成功させるための7つのポイント」を紹介します。

ワールド・カフェの標準的な流れ

ワールド・カフェの標準的な流れ（型）を紹介します。

下記の流れをもとに、目的や状況に応じて、変形、応用させることもできます。

第1ラウンド
20分～30分

テーマ（問い）について話し合う

各テーブルに4～6人ずつ座って、提示されたテーマ（問い）について話し合う。テーブルの上には模造紙が敷かれ、ペンが置いてあり、自由にいたずら書きをしながら会話を進める。

席替え

第2ラウンド
20分～30分

アイデアを「他花受粉」する

各テーブルで残る人を一人決めて、残りのメンバーは「旅人」となり、他のテーブルにばらけて移動する。残った人は、旅人を出迎えて、簡単な自己紹介を行った後に、第1ラウンドで話し合われた内容をお互いに共有する。その後は、アイデアとアイデアのつながりに注意を向けながらテーマについての話し合いを継続させる。

席替え

第3ラウンド
20分～30分

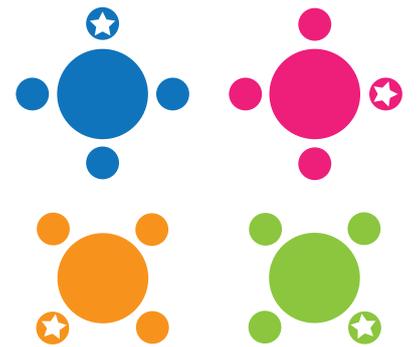
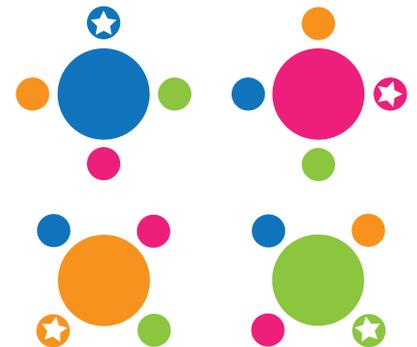
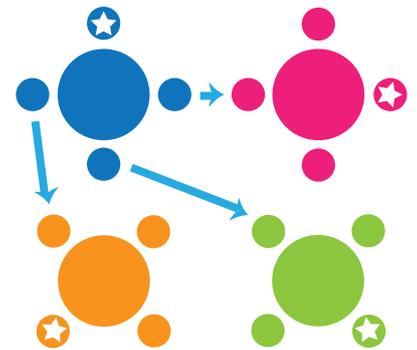
気づきや発見を統合する

第2ラウンドで別のテーブルに行っていた旅人が最初のテーブルに戻り、旅先で得たアイデアなどを統合して、どのような関係性や傾向、意味が流れているかに耳を澄ませながら話し合う。

全体セッション

集合的な発見を収穫し共有する

進行役がファシリテーターとなって、参加者全員でそれまでのラウンドで得られた気づきや発見などを共有する。その具体的な進め方は、参加者の人数や使える時間や会の目的により様々な方法で行われる。



ワールド・カフェ・デザインの可能性

ワールド・カフェ活用が一番のポイントは、ワールド・カフェの「型」を基に、それぞれの会の目的や状況に合わせて、手法そのものを変形させ、デザインすることです。あくまでも、ワールド・カフェは目的を達成するための道具（ツール）にすぎません。何を重視したいのか、その意図を主催者は細かく検討し、目的や状況に合わせて、それぞれの会に合ったワールド・カフェ・デザインをしましょう。

デザイン要素※1	デザインパターン	詳細・特徴
問い	1つの問い	最も問うべき問いについて自由に深く探求できる。問いが抽象的になることが多く、切り口は自ら模索する必要があるため、自由度が高い反面、難易度は高い。
	2つの問い	最も問うべき問いの手前に一つの切り口（問い）を提示することで、段階を踏んで探求できる。難易度は下がるが、自由度も同時に下がる。
	3つの問い	最も問うべき問いは第3ラウンドにし、第1・第2ラウンドでは、具体的で体験的な話しやすい問いにすることで、段階を踏んで探求できる。話題の流れが固定されるため、自由度は最も低い、難易度は低い。
	各テーブルの問い	一つの分野の様々な問いを同時に扱いたい時に有効。
席替え	戻る	深まりやすく、収束しやすいが、直接交流できる人数が少ない。
	戻らない	多様な視点と交流は得られるが、拡散しやすい。
テーブル人数	4人	少なすぎず、多すぎず、一番リラックスして話せる。
	5人	多くの視点は得られるが、一人あたりの話せる時間が少なくなるため、各ラウンド最低20分は確保できると良い。
	6人	少人数の良さが薄れてしまうので、人との交流に重点を置いており十分な時間が確保できる場合のみ有効。
ラウンド数	3ラウンド	最低3ラウンドないと、多様な視点と深い洞察が得にくい。
	4ラウンド	十分な時間が確保できる場合やまとめの時間を設ける場合には、ラウンド数を増やすことで、じっくり探求することができる。
ラウンド時間	15分	十分な時間を確保できない場合、やむを得ず、15分に設定する。この場合、テーブル人数を3人にして、一人あたりの話せる時間を確保することもある。
	20分	テーブル人数が4人の場合、長すぎず、短すぎず、20分が最も適切。
	25分	テーブル人数が5～6人の場合、25分あると良いが、30分あると間延びする場合もある。
全体セッション	手挙げ方式	有志の手挙げによる共有。十分な時間がないときに有効。手挙げの前に、付箋や紙に自分にとっての気づきや学びを書き出してから実施する場合もある。
	全員一言共有	参加者全員が一言で気づきや学びを共有。十分な時間があるときに有効。
	グループ発表	各グループから全体に発表する。十分な時間があるときに有効。
	ギャラリーウォーク	全員一斉に他のグループの模造紙を見て歩き回る。参加者が多いときに有効。
トーキング オブジェクト ※2	使用する	話合いのスピードがゆっくりとなる。特定の人だけが話すことを防止する作用もある。
	使用しない	お互いの配慮が十分にできる関係性が既にグループにある時には、使用しなくても良い。話し合いの最中に関係性が深まり、使用しなくなることもある。

※1 ワールド・カフェのデザイン要素は他にもありますが、ここでは、特に主要なものを紹介しています。

※2 トーキング・オブジェクトとは、話している人が手に持つ物（ボールや木や石など）のことです。テーブルの中央に置き、話したい人が自ら取り、話し終わったら元に戻します。また、発言していない人に手渡しして、聞くときに使用する場合があります。

ワールド・カフェを成功させるための7つのポイント

1. コンテキスト（前提条件）を設定する

目的、参加者、時間や予算、開催場所などを十分検討する。

コンテキストとは、ワールド・カフェを行う前の「前提条件」のことを指し、目的、参加者、およびパラメーター（会議の形式、時間、予算、開催場所、事前及び事後の打合せの内容といった運営上の諸要素など）が含まれます。ワールド・カフェでは、コンテキストを「川の土手」に例えて、土手が適切に設定されていれば、土手に沿って川の水がスムーズに流れていくと言われています。

2. もてなしの空間を創造する

快適さとお互いを尊重できる「もてなしの空間」と「心理的な安心感」を確保する。

ワールド・カフェは、リラックスした雰囲気の中で行うことを大切にしています。例えば、音楽（BGM）を流したり、お茶やお菓子を出したり、くつろげる空間を作ることで、快適さと安心感と心に余裕が生まれることによって、お互いを尊重する気持ちも自然と湧いてきます。また、スタッフ一人一人が参加者を歓迎する気持ちで迎え入れることも重要です。

3. 大切な問いを探求する

参加者が本当に話したがっている「大切な問い」をみんなで探求する

ワールド・カフェを成功に導くためには、参加者同士が“私のコト（自分事）”として真剣に取り組むことのできる「大切な問い」を提示することが重要です。「問う」ことで「考える」行為が始まり、次第に、参加者の探求心が高まっていきます。ワールド・カフェにとって、「問い」は心臓部分だと言えます。（→「問い」に関しては、詳しくは p16 へ）

4. 全員の貢献を促す

一人一人の「貢献」を促すことによって、みんなが「参画」できる場をつくる

ワールド・カフェは、一人一人の積極的な「参画」があったときにこそ、大きな効果を発揮します。しかし、人を「参画させる」ことは、そう容易なことではありません。一人一人の存在と視点が必要であることを参加者に十分に伝え、全員が「貢献」できるようにファシリテーターは促す必要があります。

5. 多様な視点を他花受粉させて、つなげる

異なる視点をつなげることで、新たな視点を見つける

ワールド・カフェは、席替えを繰り返すことで多様なメンバーの視点が交換できる仕組みになっています。異なる視点こそ、新しい視点を生み出す重要な鍵です。多様な視点を結びつけるように、ファシリテーターは参加者に促す必要があります。

6. パターン、洞察、深い問いに共に耳を澄ます

浮かび上がってくるパターン、新たな洞察、深い質問に注目する

ワールド・カフェでは、様々な視点を交換しながら話し合っていると、自然に、意見やアイデアのパターンが浮かび上がることがあります。それらのパターンに注目することで、その奥底にある「新たな洞察」や「深い問い」が発見できるかもしれません。

7. 集合的な発見を収穫し、共有する

新たな発見と洞察を可視化することによって、次の行動に移せるようにする

ワールド・カフェでは、各ラウンドを通して得られたものを、最後に全体で共有することを大切にしています。そうすることによって、個人の中での学びや気づきや発見だけにとどまらず、全体としての集合的な発見を収穫することができ、次にどのような行動が必要なのかを考えることができます。

7つのポイントを実現させるためには？

これらの7つのポイントは、ワールド・カフェを提唱しているアニータとデイビットが著書「ワールド・カフェ」の中で「大切な会話をホストするための7つの原理」として挙げているものです。どれも奥深く、抽象的な表現も多いため、「具体的にどうすれば？」と思われた方もいるかもしれません。しかし、その「問い」こそが、まさに、この7つのポイントを実現させるための重要な鍵となります。この7つは、いわば、ワールド・カフェの「哲学」とも言えますから、これらを実現させる「アプローチ（手段）」を考え続けることが大切です。例えば、「もてなし」には答えがありません。参加者を具体的にイメージして、どのような仕掛けがあったら、「もてなし」を感じてもらえるかを考えるほかないのです。このため、これらの7つのポイントを、心にとどめたまま、それぞれの会の目的や状況に合わせて、そのアプローチや仕掛けを考えていく必要があります。